

1 総合研究博物館の組織－2003年度－

館 長 大塚 裕之 教授 理学部

研究部

資料研究系	大木 公彦 教授	地質学
	橋本 達也 助教授	考古学
	福元しげ子 助手	博物館資料学
分析研究系	内木場哲也 助教授	生化学
	落合 雪野 助教授	民族植物学
研究支援推進員	桑山 龍	
一般事務	坂元 理恵	
事務局	総務部研究協力課	

運営委員（総合研究博物館専任教官を除く）

法文学部	岡部 悟朗 教授	教育学部	伊藤 正 教授
理学部	山根 正気 教授	医学部	水上 惟文 教授
歯学部	島田 和幸 教授	工学部	西 隆一郎 助教授
農学部	櫛下町鉦敏 教授	水産学部	四宮 明彦 助教授

兼務教官

地球科学分野

森脇 広	法文学部	（自然風景の変化に関する研究）
鈴木 達郎	教育学部	（地質年代学）
松井 智彰	教育学部	（斜長石巨晶の鉱物学的研究）
八田 明夫	教育学部	（理科教育、有孔虫の研究）
井村 隆介	理学部	（活断層と活火山の活動史とその災害に関する研究）
小林 哲夫	理学部	（火山地質、噴火現象、テフロクロロジー）
富田 克利	理学部	（粘土鉱物の研究）
根建 心具	理学部	（原始地球における生命と環境の共進化）
櫻井 仁人	工学部	（黒潮流軸変動・鹿児島県の気候と海）
西 隆一郎	工学部	（海洋地形学）
河野 元治	農学部	（鉱物科学・粘土科学・地球環境科学）
市川 洋	水産学部	（海洋物理学・黒潮流軸変動に関する研究）
日高 正康	水産学部	（海底地質学・浅海沿岸域の海底地質と底層流）

生物学分野

野田 伸一	多島圏研	（医学的に重要な昆虫・ダニ類の分布）
河合 溪	多島圏研	（南西諸島における海産無脊椎動物の種分化）
久保田康裕	教育学部	（植物群集の動態と多様性の維持機構）
宮本 句子	理学部	（陸上植物の多様性の開放）
相場慎一郎	理学部	（多雨林の樹木種多様性）
鈴木 英治	理学部	（熱帯林の動態と更新・鹿児島県の植生）
塚原 潤三	理学部	（海産無脊椎動物の生殖と発生）
山根 正気	理学部	（東南アジア産剣膜翅類の分類と生物地理）
富山 清升	理学部	（軟体動物貝類）
佐藤 正典	理学部	（海産底生無脊椎動物の分類学的研究）
一谷 勝之	農学部	（作物の遺伝的多様性）

馬田 英隆	農学部	(きのこ学・菌類生態学・造林学)
米田 健	農学部	(森林の生態と管理)
富永 茂人	農学部	(農業技術と農器具の進歩に関する研究)
中西 良孝	農学部	(在来家畜および野生化動物の保護と活用に関する研究)
櫛下町鉦敏	農学部	(農林業害虫の生態および食虫性昆虫の分類と生態)
四宮 明彦	水産学部	(魚類の分類生態学の研究)
鈴木 廣志	水産学部	(大型十脚甲殻類の分類と生態)
大富 潤	水産学部	(エビ・カニ類および魚類の資源生物学)
小澤 貴和	水産学部	(魚類仔稚魚研究、サイウオ科魚類の分類学的研究)

考古学・歴史学・民俗学分野

中村 直子	法文学部	(南部九州の弥生・古墳時代の研究)
新里 貴之	法文学部	(琉球列島における先史時代の考古学的研究)
本田 道輝	法文学部	(九州と南西諸島の文化交流の研究)
新田 栄治	法文学部	(東南アジア考古学)
渡辺 芳郎	法文学部	(薩摩焼の考古学的研究)
原口 泉	法文学部	(薩摩藩の博物学)
下原 美保	教育学部	(近世初期のやまと絵について、近世薩摩の絵師について)
藤枝 繁	水産学部	(鹿児島県海岸における漂着物に関する研究)
田中 卓夫	歯学部	(南九州僻地離島地域における歯科民間療法史に関する研究)

理学・教育学分野

森 邦彦	学術情報基盤センター	(光情報処理、遺伝的アルゴリズム)
佐野 英樹	学術情報基盤センター	(システム制御理論)
木下 紀正	教育学部	(衛星データによる環境解析と立体表示技術の開発)
土田 理	教育学部	(観察・実験場面における児童・生徒のグラフ認知過程、観察・実験活動へ児童・生徒同士のコミュニケーションが果たす役割)
有馬 一成	理学部	(タンパク質分解酵素アイソザイムの分子進化)
坂元 隼雄	理学部	(環境試料中の微量元素の含有量と分布)
穴澤 活郎	理学部	(非人為作用による水質形成機構の解明)
米澤 弘夫	理学部	(酵素化学・タンパク質化学・ペプチド化学)
富安 卓滋	理学部	(環境中における水銀の挙動)
楠本 芳文	理学部	(グラファイトシリカと光触媒に関する研究：クリーンエネルギー源(水素)の製造、環境浄化、がん治療等への応用を含む)
八木 史郎	農学部	(植物・菌類のレクチンタンパク質の分布)
大西 佳子	歯学部	(歯学関係の展示研究、サイエンス・コミュニケーション)

学外協力研究者

秋元 和實	熊本大学沿岸域環境科学教育研究センター助教授	(古生物学、底生有孔虫類を用いた地質時代の海洋環境の復元)
池田 豪憲	(鹿児島県から琉球列島に至る地域の樹木分類)	
石畑 清武	鹿児島大学名誉教授	(熱帯園芸学、熱帯果樹、植物、野菜類の導入、順化、生態、形態の研究評価とそれらの栽培及び改良に関する研究)
稲田 博	(社)鹿児島県測量設計業協会 常任顧問	(河川工学)
浦島 幸世	鹿児島大学名誉教授	(地殻における元素の移動と濃集、たとえば熱水の

溶存物質の移動と濃集による金属鉱床の研究)

- 太田 英利：琉球大学熱帯生物圏研究センター助教授（爬虫両生類の系統・分類・生物地理）自然史・保全、特にアジア東部からオセアニア西部にかけての亜熱帯および熱帯域の島嶼における種分化、系統進化について研究)
- 金田 信：鹿児島大学名誉教授（植物に含まれるタンパク質分解酵素、特にセリン型酵素クリミシンの研究)
- 税所 俊郎：鹿児島大学名誉教授（海洋生物学、水族生態学、水産動物学に関する研究)
- 鮫島 正道：第一幼児教育短期大学助教授（動物形態学、鳥類骨格による比較形態学的研究、鹿児島県に分布する脊椎動物のフィールド調査による生態観察と分類・形態学的研究)
- 下山 正一：九州大学大学院理学研究院地球惑星科学部門生物圏進化学講座助手（古生物学と地質学、軟体動物化石の系統分類と群集古生態の研究・生物起源堆積物の生成、運搬、拡散過程の理論的研究・新生代の地層区分と年代測定に関する地質学的研究・化石と地層を使った九州の地殻運動累積傾向の研究)
- 田川日出夫：鹿児島大学名誉教授（生物学・植物分類学)
- 田代 正盛：タシロ眼科医院（医学・眼科、眼球の病理組織学的研究)
- 土田 充義：鹿児島大学名誉教授（日本建築史、神社建築・日本の民家・近代建築を研究)
- 永富 昭：鹿児島大学名誉教授（アブ重目・昆虫綱：ハエ目の分類に関する研究)
- 西中川 駿：鹿児島大学名誉教授・放送大学鹿児島学習センター所長（動物考古学、動物解剖学)
- 早坂 祥三：鹿児島大学名誉教授（層位学、古生物学、地史学、海洋地質学)
- 福田 晴夫：鹿児島県自然環境保全審議会委員（昆虫生態学、蝶類の生活史・日本蝶相の成立史、とくに南方からの移動種に関する研究)
- 丸野 勝敏：(カヤツリグサ科植物、ハリイ属植物、ミクリ科植物の分類)
- 堀田 満：鹿児島県立短期大学長・鹿児島大学名誉教授（植物系統分類・地理学、熱帯植物学、有用・民族植物学の研究)
- 三木 靖：鹿児島国際大学短期大学部長（中世城郭史、日本荘園史、戦国史、南島史、文化財史の研究)
- 山下 智：鹿児島大学名誉教授（動物生理学とくに味覚・嗅覚の神経生理学を専門とし、化学感覚の神経情報の電気生理学的解析、および昆虫、魚類、両生類にわたる比較生理学の研究)
- 湯川 淳一：九州大学大学院農学研究院教授・九州大学総合研究博物館長・鹿児島大学名誉教授（タマバエ類の分類学的及び生態学的研究・昆虫と寄主植物の相互関係・地球温暖化が昆虫に及ぼす影響・インドネシア、クラカタウ諸島の生態遷移に関する研究)

2 総合研究博物館規則等

総合研究博物館規則等について本年度の制定および変更はなかった（2002年度と同じ）。

鹿児島大学総合研究博物館規則

（平成13年4月1日 制定）

（趣旨）

第1条 この規則は、鹿児島大学学則（平成9年4月1日制定）第9条第2項の規定に基づき、鹿児島大学総合研究博物館（以下「博物館」という。）の組織及び運営に関し必要な事項を定める。

（目的）

第2条 博物館は、鹿児島大学（以下「本学」という。）の学内共同教育研究施設として、本学の学術標本資料の収蔵、展示、公開及び学術標本資料に関する教育研究の支援を行うとともに、学内外の教育研究活動に寄与することを目的とする。

（業務）

第3条 博物館においては、次に掲げる業務を行う。

- (1) 学術標本資料の収集及びその利用に関すること。
- (2) 学術標本資料の解析及び学術評価に関すること。
- (3) 学術標本資料の情報化に関すること。
- (4) その他博物館の目的を達成するために必要なこと。

（研究部）

第4条 博物館に、研究部を置く。

2 研究部に、次の2系を置く。

資料研究系

分析研究系

（職員）

第5条 博物館に、次に掲げる職員を置く。

- (1) 博物館長
- (2) 専任教官
- (3) その他必要な職員

2 前項第2号及び第3号の職員は、博物館長の命を受け、博物館の業務に従事する。

（博物館長）

第6条 博物館長は、本学専任教授のうちから、第9条に定める管理委員会が推薦し、学長が選考する。

2 博物館長は、博物館の業務を掌理する。

3 博物館長の任期は2年とし、再任を妨げない。

4 博物館長に欠員を生じた場合の補欠の博物館長の任期は、前任者の残任期間とする。

（兼務教官）

第7条 博物館に、兼務教官を置くことができる。

2 兼務教官は、所属部局長を経て申し出のあった者について、学長が兼務を命ずる。

3 兼務教官の任期は2年とし、再任を妨げない。

（協力研究者）

第8条 博物館に、学外の協力研究者を置くことができる。

2 協力研究者は、次条に定める管理委員会の議を経て、博物館長が委嘱する。

（重要事項の審議）

第9条 博物館の管理運営に関する重要事項については、鹿児島大学学内共同教育研究施設管理委員会（以下「管理委員会」という。）において審議する。

（運営委員会）

第10条 博物館に、鹿児島大学総合研究博物館運営委員会（以下「運営委員会」という。）を置く。

2 運営委員会は、管理委員会が定める管理及び運営の基本方針に基づき、博物館の運営に関する具体的事項を審議する。

3 運営委員会は、次に掲げる委員をもって組織する。

(1) 博物館長

(2) 博物館の専任教官

(3) 各学部の教授、助教授又は講師のうちから選出された者各1名

4 前項第3号に規定する委員は、それぞれの部局の長の推薦に基づき、学長が任命する。

5 第3項第3号に規定する委員の任期は2年とし、再任を妨げない。ただし、委員に欠員を生じた場合の補欠の委員の任期は、前任者の残任期間とする。

6 運営委員会に委員長を置き、博物館長をもって充てる。

7 委員長は、運営委員会を招集し、その議長となる。

8 委員長に事故があるときは、委員長があらかじめ指名した委員がその職務を代行する。

9 運営委員会は、委員の過半数の出席により成立し、議事は出席委員の過半数により決し、可否同数のときは議長の決するところによる。

10 運営委員会が必要と認めるときは、委員以外の者を出席させ、意見を聴くことができる。

(専門委員会)

第11条 運営委員会に、専門的事項を審議するため、専門委員会を置くことができる。

2 専門委員会に関し必要な事項は、運営委員会が別に定める。

(事務)

第12条 博物館に関する事務は、総務部研究協力課において処理する。

(雑則)

第13条 この規則に定めるもののほか、博物館に関し必要な事項は、別に定める。

附 則

1 この規則は、平成13年4月1日から施行する。

2 この規則施行後、最初に任命される博物館長の選考については、第6条第1項の規定にかかわらず、鹿児島大学将来計画委員会総合研究博物館専門部会の推薦する者について、学長が行う。

鹿児島大学総合研究博物館学外協力研究者に関する申合せ (平成14年2月21日制定)

(趣旨)

1 鹿児島大学総合研究博物館規則第8条第1項の規定に基づき、鹿児島大学総合研究博物館(以下「博物館」という。)の研究等の推進を図るため、学外協力研究者に関する必要事項について申し合わせる。

(申し込み)

2 学外協力研究者として、博物館において協力活動を行おうとする者は、所定の申込書(別紙様式第1号)により博物館長に提出するものとする。

(選考方法)

3 博物館長は、2により申し込みのあった者について、鹿児島大学総合研究博物館運営委員会(以下「運営委員会」という。)で選考し、鹿児島大学学内共同教育研究施設管理委員会に推薦するものとする。

(受入期間)

4 学外協力研究者の受入期間は、2年とし、再任は妨げない。

(給与及び経費)

- 5 学外協力研究者にかかる給与及び必要経費については、博物館は負担しない。
(協力内容)
- 6 学外協力研究者は、博物館の職員と連携し、博物館の標本の整理・保管、その標本に基づく研究等の推進のための協力を行うものとする。
(研究の公開)
- 7 学外協力研究者は、博物館の協力活動を通じて知り得た研究データ等を公開しようとする場合は、博物館長の承諾を得て行うものとする。
(活動中の事故)
- 8 学外協力研究者が活動中に不慮の事故を受けた場合は、それにかかる費用は本人が負担するものとする。
(その他)
- 9 この申合わせに定めるもののほか、学外協力研究者に関する必要な事項は、運営委員会が別に定める。

附 則

- 1 この申合せは、平成14年2月21日から施行する。
- 2 この申合せ施行後、最初に委嘱される学外協力研究者の受入期間は、4の規定にかかわらず、平成15年3月31日までとする。

鹿児島大学総合研究博物館専門委員会内規

(平成13年7月11日 制定)

(趣旨)

- 1 鹿児島大学総合研究博物館規則第11条2項の規定に基づき、専門委員会に関する必要事項を定める。

(専門委員会)

- 2 専門委員会に次の3つの委員会を置く。
- 1) プロジェクト推進委員会
 - ・研究プロジェクトの企画・実施
 - ・研究プロジェクトの推進を支援するための活動
 - 2) 企画交流委員会
 - ・シンポジウム、研究会、公開講座等の企画及び実施
 - ・学外協力研究者の募集・登録及び協力研究者との情報交換
 - ・ボランティアの募集・登録及びボランティアとの情報交換
 - ・客員研究員の募集
 - 3) 出版広報委員会
 - ・ニュースレター、広報等の編集・刊行
 - ・モノグラフの編集・刊行
 - ・ホームページの編集・管理
 - ・その他博物館の行なう出版広報活動

(委員長および委員)

- 3 兼務教官の中から館長・専任教官が各専門委員会の委員長を選出し、委員長および専任教官が各委員会3名、計9名の兼務教官を委員に推薦する。

(委員長および委員の任期)

- 4 各専門委員会の委員長および委員の任期は2年間とする。但し再任は妨げない。

(専任教官および館長)

- 5 専任教官はすべての委員会の委員として出席する。館長はすべての委員会に出席することができ、必要と考える時は、委員長に会議の開催を要請できる。

6 各専門委員会委員長は、プロジェクト・企画交流・出版広報の各委員会にその分野に関係した兼務教官の参加を求めることができる。

7 重要議題については、館長が兼務教官を召集し意見を聞くことができる。その場合、館長が議長となる。

- 1 この内規は、平成13年7月11日から施行する。
- 2 この内規施行後、実状に即して内規を変更することができる。
(3の規定：平成13年11月14日に行なわれた第5回運営委員会にて変更)

1. プロジェクト推進委員会
委員長：塚原 潤三（理学）
八田 明夫（教育）；鈴木 廣志（水産）；河合 溪（多島研）
専任教官：大木 公彦
2. 企画交流委員会
委員長：渡辺 芳郎（法文）
山根 正気（理学）；富安 卓滋（理学）；桜井 仁人（工学）
専任教官：落合 雪野
3. 出版広報委員会
委員長：土田 理（教育）
井村 隆介（理学）；有馬 一成（理学）；藤枝 繁（水産）
新里 貴之（埋文）
専任教官：橋本 達也

5月17日 10:00-15:00
生涯学習県民フェア 参加
かごしま県民交流センター（鹿児島市）
総合研究博物館ミニ展示・各講座紹介等

第3回 研究交流会
「海と陸のあいだー渚の自然と生物多様性ー」
加藤 真（京都大学大学院人間・環境学研究科）「汀線の自然史」
佐藤正典（鹿児島大学理学部）「ゴカイからみた干潟の豊かさ」
場所：郡元キャンパス 総合教育研究棟201号室 参加自由 入場無料

第3回 公開講座「大学博物館へのいざない 鹿大に集められた植物－植物園と標本室－」
馬田英隆(鹿児島大学農学部)・池田豪憲(鹿児島大学総合研究博物館学外協力研究者)
丸野勝敏(鹿児島大学総合研究博物館学外協力研究者)・落合雪野(鹿児島大学総合研究博物館)
場所：郡元キャンパス 総合教育研究棟201号室・植物園・植物標本室

6月10日～26日

第1回企画展 「郡元キャンパスの古墳時代」
鹿児島大学附属図書館 1F ホール

6月14～15日

公開研究会 共催 九州前方後円墳研究会 第6回大会
「前方後円墳築造周縁域における古墳時代社会の多様性」

会場：鹿児島大学教育学部大講義室

【地域発表】古墳築造の周縁域の諸相

柳沢一男（宮崎大学教育文化学部）「南九州における古墳の形成と展開」

尾上博一（厳原町教育委員会）「壱岐・対馬および長崎の古墳の様相」

村上恭通（愛媛大学法文学部）「四国西部における前方後円墳の展開」

藤沢 敦（東北大学埋蔵文化財調査研究センター）「北の周縁域の墳墓」

安座間充（鹿児島大学埋蔵文化財調査室）琉球列島の古墳時代併行期前後の様相

【講演】

白石太一郎（国立歴史民俗博物館）「周縁から前方後円墳を考えるー前方後円墳体制論の再検討ー」

【テーマ発表】交流の諸相～南九州を中心として～

坪根伸也（大分市教育委員会）「南九州の集落と土器の様相」

橋本達也（鹿児島大学総合研究博物館）「副葬鉄器からみる南九州の古墳時代」

大西智和（鹿児島国際大学国際文化学部）「西日本の積石塚」

木下尚子（熊本大学文学部）「古墳時代併行期の九州と南島」

竹中正巳（鹿児島大学歯学部）「人類学からみた南九州の古墳時代人」

ポスターセッション・シンポジウム

6月15日

公開シンポジウム 後援 第13回 日本熱帯生態学会 年次大会

「熱帯林の減少とその原因」

場所：鹿児島大学郡元キャンパス 稲盛会館

米田 健（鹿児島大学農学部生物環境学科）「はじめに」

鈴木英治（鹿児島大学理学部）「インドネシアにおける森林保護区の荒廃」

井上 真（東京大学大学院農学生命科学研究科）「熱帯林の保全におけるローカルガバナンスの重要性ー西クタイ県の試みをもとに」

竹田晋也（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究科）「東南アジア大陸部産地の森林保全ーミャンマーとラオスの事例からー」

薄木三生（東洋大学国際地域学部）「東南アジアの熱帯林を中心とした国立公園・保護地域の現状と課題」

総合討論

7月19日 13：30－16：30

第3回 市民講座 「川の自然と防災ー平成5年豪雨災害から10年ー」

8・6豪雨災害を映像で振り返る（ビデオ上映）

地頭蘭隆（鹿児島大学農学部）「平成5年に何が起きたかー土砂災害を中心にしてー」

大木公彦（鹿児島大学総合研究博物館）「8・6豪雨災害から何を学ぶのか」

場所：郡元キャンパス 総合教育研究棟201号室

7月26日 10：00－16：45

公開講座 第3回 自然体験ツアー「甲突川の自然環境と防災」

対 象：小学5.6年生以上の児童・生徒および一般45名
場 所：甲突川の源流から河口まで（貸し切りバスで移動）
案内者：大木公彦（鹿児島大学総合研究博物館）、穴澤活郎（鹿児島大学理学部）、
井倉洋二（鹿児島大学農学部高隈演習林）

7月25日～8月6日

共催 鹿児島県立図書館展示「地球からの贈り物 ～日本の金鉱石・鉱物展」

8月2日 13：30－16：30

博物館実験教室 「DNAを抽出、分析しよう（実験） さまざまな役立つDNA分析（講義）」

講師：内木場哲也（鹿児島大学総合研究博物館）

対象：中学生・高校生15名

場所：郡元キャンパス 総合教育研究棟201号室

10月23日～11月24日 9：30～17：30

第3回 特別展

「海と生命の歴史－化石は語る－」

場所：郡元キャンパス 総合教育研究棟2F プレゼンテーションホール

入場無料

11月16日 10：00－12：00

第4回 公開講座 「三葉虫を調べよう」

講師：大野照文（京都大学総合博物館）

場所：郡元キャンパス 総合教育研究棟201号室

11月16日 15：10－16：40

第4回 市民講座 「三葉虫が見た海の世界」

講師：大野照文（京都大学総合博物館）

場所：郡元キャンパス 総合教育研究棟201号室

11月16日 13：30－15：00

ミニコンサート 「海の調べ」

池田博幸（フルート）・有村航平（チェロ）・中島俊子（ピアノ）

12月1日 15：30－17：30

第4回 研究交流会 「弥生時代の新しい見方」

講師：春成秀爾（国立歴史民俗博物館）

場所：郡元キャンパス 理学部101号講義室 無料

2004年2月16日 13：30－16：00

第4回 生命科学学術講演会（共催）「麹菌を利用したゼロエミッションシステム」

講師：山元正博（霧島高原ビール株式会社 代表取締役）

場所：郡元キャンパス 理学部220号講義室

2月28日

第2回 ワークショップ「アジア東部に独自の穀類のモチ性とモチ文化」

講師：阪本寧男氏（京都大学名誉教授）

場所：郡元キャンパス 総合教育研究棟201号室

5 2003度の活動報告

1. 研究交流会

研究交流会は博物館に関係するさまざまな分野の専門家を講師として招待し、研究者間の議論をは深め、交流をはかることを目的として開催する研究会である。2002年度からはじめ、本年度は2回の研究交流会を実施した。

第3回研究交流会 「海と陸のあいだー渚の自然と生物多様性ー」

渚という空間は、海と陸をつなぐ空間として、また、海でも陸でもない空間として、自然環境の中でも特異な位置を占めている。2003年5月31日に開催した第3回研究交流会では、この渚の自然とそこに生息する生物の多様性をテーマに、生物学者の佐藤正典氏（鹿児島大学理学部助教授）と生態学者の加藤真氏（京都大学大学院人間・環境学研究科教授）に講演をしていただいた。

佐藤さんは、1978年以来研究を継続している、多毛類のゴカイをとりあげた。日本のゴカイはよく似た3種からなり、そのうちの1種はかつて日本に広く分布していたが、最近100年間の沿岸開発の影響で泥干潟が失われた結果生息地が縮小し、結果的に現在有明海奥部だけに残されるようになったものであるという。しかも、諫早湾の閉め切りにより、その1種がいままさに失われようとしている。佐藤さん自身の干潟での観察と、残されたゴカイ標本の調査を組み合わせ、語られるストーリーに、参加者は大きな関心を示していた。ふだんあまり知ることのないゴカイの生態をきっかけに、ゴカイとその捕食者との関係や、ひいてはゴカイをとりまく干潟という環境までに視野を広げることができたといえよう。

いっぽうの加藤さんは、汀線をキーワードに、瀬戸内海、東京湾、甕島（うみ）の海鼠池など、さまざまな地域の渚の環境を示し、そこでくりひろげられる生き物の複雑なつながりについて紹介した。かつて「清き渚」、「貝寄せる渚」、「まれびと来臨の渚」、「豊饒の渚」などと称され、いつくしまれてきた渚が、最近では開発や埋め立て、海岸林の伐採などの影響を受け、その風景を激変させている。また、そこをすみかとする生物相も様変わりしている。具体的な事例やスライドとともに解説されるその変化のありさまに、参加者の多くが驚嘆せざるをえなかった。

この研究交流会は、特別展「海と生命の歴史ー化石は語る」に関連づけて開催したものであった。渚に焦点をあてることにより、これまでとはまた別の角度から海の生物と自然についての理解が深まったと考えられる。質疑応答の時間には、とくに学生から質問が多く出され、環境保全や生物保護についての諸問題が討論された。



第3回 研究交流会



加藤 真氏（右）・佐藤 正典氏（左）

第4回研究交流会 「弥生時代の新しい見方」

2003年5月、国立歴史民俗博物館の研究グループは弥生時代の始まりを紀元前400年頃とする従来通説に対して、新たなAMS炭素年代測定法による研究から、実際にはさらに500年以上さかのぼる時期に始まっていたとする説を提唱した。

これは単に年代の古い新しいという問題にとどまらず、日本列島における縄文時代の狩猟採集社会から弥生時代の農耕社会へという、生業・社会形態の大変革が東アジア社会のいかなる歴史環境のもとに引き起こされたのかという重要な問題をはらんでいる。中国、朝鮮半島の歴史との関係が切り離せないきわめて重要な歴史観の転換につながる問題である。

これには2003年から2004年にかけて、学問的な反響は当然のこととして、教科書への記述の影響などマスコミを含む大きな反響が巻き起こった。

この問題に関して、最新の情報を得るために、研究グループを代表し、研究を牽引してきた国立歴史民俗博物館教授 春成秀爾氏にその成果について講演をいただく企画を立てた。

従来の研究の問題点から、新たな研究が生み出しつつある成果について1時間半ほどの丁寧な解説があり、その後、質疑応答が行われた。成果については世界標準である自然科学分析法の歴史学への積極的な導入の必要性や導入によって新たな歴史像を描きうることなどが説明されたが、いまだ研究途上であり今後解決していかなければならない問題も残っていることも説明があった。

2003年の5月にこの成果が公表されて以来、大きな反響があり、その後、福岡では研究会などが開催されているが、国立歴史民俗博物館の研究グループから九州地域において研究発表が行われたのはこの会がはじめてであった。学内外からの多くの参加があり、新たな最新の研究の成果・方向性を学ぶ重要な機会を提供し得たものと考えている。



第4回 研究交流会



春成 秀爾氏

2. 市民講座

第3回「川の自然と防災—平成5年豪雨災害から10年」

7月19日(土)の午後1時半～4時半まで、鹿児島大学総合教育研究棟201号室において市民講座を開催し、50名をこえる市民が集まった。

1993年8月6日に鹿児島市甲突川流域を襲った洪水の経過について市民が撮影したビデオを放映後、兼務教官で鹿児島大学農学部助教授の地頭蘭 隆氏が、「平成5年に何が起きたか—土砂災害を中心に—」と題して、集中豪雨による土砂災害のメカニズムを講演した。



第3回 市民講座



地頭菌 隆氏



大木 公彦

さらに総合研究博物館の大木公彦が、「8・6豪雨災害から何を学ぶのか」と題して、甲突川流域の地形・地質の特徴と8・6洪水の経過から見えてくる都市開発の問題点や防災について講演した。一般市民にまじって気象庁の専門官も参加し、災害と防災について質疑が交わされた。

第4回「三葉虫が見た海の世界」

特別展の一環として、11月16日(日)の午後3時10分～4時40分まで、鹿児島大学総合教育研究棟201号室において市民講座「三葉虫が見た海の世界」を開催し、約30名の市民が参加した。京都大学総合博物館教授の大野照文氏が、三葉虫が生息していた古生代の海の世界を化石の研究からどのように明らかにするのか、その方法論について講演し、聴衆は古代のロマンに聞き入った。



3. 公開講座

(1) 自然体験ツアー「甲突川の自然環境と防災」

7月26日(土)に自然体験ツアーを開催し、36名の参加者が大型バスで甲突川の源流から河口までの自然を観察した。

総合研究博物館の大木公彦（地質学）を中心に、鹿児島大学理学部助手の穴澤活郎氏（無機化学）、鹿児島大学農学部高隈演習林助教授の井倉洋二氏（森林環境学）の案内で、甲突川の地形と地質の意味、森林の役割、水質などについて学んだ。

甲突川源流では森林の役割や地下水と湧水について、中流では田の分布と地形・地質との関係





について、下流から河口では沖積層と河川のかかわりについて説明があった。また、甲突川源流と中流の2カ所で水質検査試薬を使って水質を調べ、甲突川が都市部を流れる川としては汚染されていないことに多くの参加者が満足していた。

(2) 大学博物館へのいざない「鹿大に集められた植物－植物園と標本室－」

鹿児島大学には、教育や研究のための学術資料として、南九州を代表する樹木群が植物園に植栽され、また、植物標本室には14万点あまりの腊葉標本が収蔵されている。

学内に植物園と標本室の両方が存在し、植物を生体と標本の両方から観察できることは、教育や研究にとって大きな利点である。鹿児島大学のこのような側面を紹介するため、農学部植物園と協力し、2003年6月21日、公開講座「鹿大に集められた植物－植物園と標本室－」を開催した。

9時30分に総合研究棟201号室に集合した参加者20名は、まずその場で概要説明を受けたあと、



鹿大に集められた植物－植物園と標本室－

植物園に移動し、実際に生えている植物を観察しながら、馬田英隆氏（鹿児島大学農学部教授）からキノコについて、池田豪憲氏、丸野勝敏氏（ともに鹿児島大学総合研究博物館学外協力者）から樹木について、それぞれくわしい解説をうけた。午後からは、落合雪野（総合研究博物館）から植物標本の意義や作り方について紹介があったあと、植物標本室に移って内部を見学し、その役割について理解を深めた。

参加者の感想では、じっさいに植物や標本の実物を見ながらの講座は、具体的で面白く、おおむね好評であった。また、講師のご協力によって充実した手引きを作成し、配布することができたのも、理解を深めるのに役立った。ただし、参加者の大部分が社会人であったため、小学生の参加者1名にはわかりにくい点が多々あったと思われる。この点については、参加者の年齢を区切って開催するなど、今後の講座運営の指針としなければならないだろう。

今回は講座を円滑にすすめるために、あらかじめ参加申込みを募ったところ、定員20名に対して26名と多数の応募があり、人気の高い講座となった。その内訳を見ると中高年層が約7割を占め、うち60歳を超える方の申込みも8名あったのに対し、若年層から申込みは極端に少なかった。植物に関心を寄せる世代にかたよりが見られることを実感したところである。なお、抽選にもれて参加できなかった方に手引きをお送りし、たいへんな好評を得ている。

（3）公開講座「三葉虫を調べよう」

特別展の一環として、11月16日(日)の午前10時～12時まで、鹿児島大学総合教育研究棟201号室において公開実習「三葉虫を調べよう」が開催され、40名の市民が参加した。

バックに三葉虫がデザインされたハッピを着た京都大学総合博物館教授の大野照文氏が、三葉虫の本物の化石や模型を使って古生代の地球に生息していた三葉虫の生態を化石から推定する研究法や、三葉虫の進化をととてもわかりやすく冗談を交えながら説明し、会場は笑いが絶えなかった。

12名の小中学校の生徒だけでなく、参加した保護者も大野氏の情熱と話術に引き込まれ、本物のめずらしい三葉虫化石に触れることができ、大変満足した様子であった。



大野 照文氏



公開実習「三葉虫を調べよう」

4. 特別展「海と生命の歴史－化石は語る－」

第3回特別展「海と生命の歴史－化石は語る－」を、10月23日(木)～11月24日(月)の33日間、鹿児島大学総合教育研究棟2階のプレゼンテーションホールで開催した。

鹿児島大学理学部地球環境科学科地球コース(旧地学教室)に収集された化石標本を中心に、正しい化石観と、化石の持つ「地質年代のマーカー」および「地質時代の環境指標」の2つの役割について解説することを目的として展示を行った。さらに、南九州から沖縄に至る地域に分布する海の地層から産出した化石を陳列して、この地域の“海と生命の歴史”が読み取れるように展示を組み立てた。

期間中、1593名が訪れ、化石の世界を堪能した。とくに触れる化石コーナーと微化石コーナーは人気が高く、中には1時間近くも実体顕微鏡を占拠する児童もいるほどであった。

マスコミの取材も、上記二つのコーナーに触れ、地球上で最初に酸素を作り出したとされる藍藻類(シアノバクテリア)の化石であるストロマトライト、種子島から産出した魚類、カニやカエルの化石、星砂がその仲間である有孔虫や、美しい骨格を持つ放散虫などに集中した。

第3回特別展「海と生命の歴史－化石は語る－」 概要

会 期：2003年10月23日～11月24日

会 場：鹿児島大学郡元キャンパス 総合教育研究棟2階
プレゼンテーションホール

開館時間：9：30～17：30(期間中前日開館)〔入場無料〕



第3回特別展「海と生命の歴史－化石は語る－」

特別展アンケート結果

総合研究博物館では、アンケート用紙を用意し、任意で記入をお願いした。結果を以下に示す。
アンケート回答数：427名（入場者1594名のうち）

1、どこからこられましたか？

学内：215名、学外／市内：154名、学外／県内市外：43名
県外15名：（神奈川、大阪、兵庫、山口、福岡、熊本）

2、ご感想はいかがでしたか？（重複回答あり）

おもしろかった：	267	(56.8%)
興味をもった：	199	(42.4%)
何とも思わなかった：	3	(0.6%)
つまらなかった：	1	(0.2%)
回答数	470	

3、いちばん印象に残ったものは何ですか

<展示品に関するもの>

縄文海進と平野の出現：最終間氷期の鹿児島湾：形之山化石群（第2回目の調査に協力した）：鹿児島湾と志布志湾がかつてつながっていたこと：化石をさわらせてもらったこと：アンモナイトが黄鉄鉱に置換した標本はロストワックスに似て面白かった：触れることのできる化石があったこと：顕微鏡で微化石を見られたこと：有孔虫の顕微鏡観察：有孔虫のコーナー：恐竜の骨の化石（思いのほか重かった）：白亜紀の地層：アンモナイトの化石：クジラの先祖の化石：メソニクス（ヒゲクジラ）：クジラの下顎：クジラの進化過程の化石：クジラの耳石：4足のクジラの化石：単細胞の化石：単細胞生物が形作る幾何学模様：ズーフイコスの化石：エディアカラ動物の化石：サラシノイデス：ハオリムシの化石：巨大なマガキ：酸素をつくったバクテリア：ストロマトライトの化石を初めて見て、しかも触れたこと：カエルの化石：西之表アユ化石：微化石の世界：マンモスの毛：ガザミの化石：有孔虫：星砂が動物であったこと：イシカワガエルの化石：フズリナの化石：イノセラムスの大小あること：遺体化石と生痕化石：サメの歯：デスモスチルスの歯：カルカロドンの歯の化石：アオザメのアゴの標本：スカシカシパンウニ（幼い頃、浜辺で探していましたが、「カシパン」といっていましたが、正式名称は知りませんでした）：琥珀：琥珀の中の昆虫：三葉虫の化石：糞石：ワニの足跡：魚の化石類（骨の形が美しい）：魚やノコギリガザミなどの一瞬にして化石となったもの：ウミユリの化石：植物の化石：炭化木：オオバタグルミの化石：クルミの化石、日本文学専攻なので宮沢賢治がみつけたというのが目にとまった：オパール化した木：始良郡内の国分層群から発掘された生物化石と種子島の化石：波の化石：さまざまな保存状態を示す化石コーナー：化石がよく理解できていなかったことがわかったこと：さまざまな保存状態を示す化石コーナー：地質と化石の関係

<展示全体について>

- ・各学部が創意工夫していることに感動しました
- ・鹿児島の地層の変動が化石で分かるという事
- ・近場（鹿児島）にもたくさんの化石があるんだと驚いてしまいました

4、よかったものと悪かったものをあげてください。

<よかったもの>

ミニコンサートと講演会（関連行事）：有孔虫：微化石の世界：サメの歯：ストロマトライト：縞状鉄鋼層と磁石：酸素を出した藻の一種（とっても驚きました）：アンモナイトの化石：解説：西之表の化石：琥珀、アンモナイトの置換化石：古第三紀の化石：クジラの化石：恐竜の骨に触れたこと：イシカワガエルの化石：火砕流に巻き込まれた炭化した流木の化石：ビーチロック：

ワニの足あと：カメの化石（実験コーナー）：ズーフィコス：マンモスの毛：アオザメの顎骨：マンモス顎骨：手作りのパネル：ウラシマガイ：貝の化石が豊富なこと：標本の数、保存状態がよかったこと：時代を表す化石：遺体化石と生痕化石：恐竜の骨（案外重かったこと）：魚の化石（とてもキレイに残っていて驚いた）：三葉虫やアンモナイトの大きさが実感できたこと：カエルの化石、化石として残ったということが、どんなにスゴイのか解説を聞いて、興味がわいた：わかりやすい並べ方：展示解説のパンフレットをもらえたこと：入口の説明文、化石とは？をわかり易く説明していた：示準化石と示相化石：化石の原物が見られたこと：展示がわかりやすい、説明もよかった：詳しく説明していただいたこと（ロマンがあっていいなー）：すべてに興味つきない：展示品に触れることのできるコーナーがあったこと：実際に化石に触れる機会が少ないので、今回、鹿児島県の化石なども見られて、身近に感じられてよかった：鹿児島県の地質：縄文海進と平野の出現：南九州のものが多く、それがよかった：どれをみてもびっくりするばかりでした、こんなにたくさんの化石を体系的に見たのは初めてでした：スタッフより直接解説いただき、わかりやすく、また質問もできてとても勉強になりました。実物を見ることができ、また一部は触ることもできました：鹿児島県に化石があることを知ってよかったです：会場の雰囲気と環境とてもよく整理されていた：あらゆるものが興味の対象でした

<悪かったもの>

展示の説明文が小学生でも読めて、興味を持てるようにしてもらえたらと思います：素人には年代の移り変わりがわかりにくかった：等高線：化石をもっとたくさん見たい：モクハチアオイ：鹿児島県以外の化石を見たい：もう少し一つ一つの化石についての説明がほしい：少し字が小さい：拡大鏡で見たいものがいくつかあった（拡大鏡がたりなかった）

5、この展示を何でお知りになりましたか？

ニュースレター	27	(5.4%)
市電広告	16	(3.2%)
市バス広告	1	(0.2%)
JR車内広告	1	(0.2%)
JR駅広告	0	(0 %)
新聞	56	(11.2%)
ポスター	117	(23.4%)
垂れ幕	28	(5.6%)
たて看板	40	(8 %)
人にすすめられて	128	(25.6%)
ニュース	25	(5 %)
その他	61	(12.2%) ※下記参照
回答数	500	

その他：学内メーリングリスト、配布された宣伝ビラ、HP、学祭にきて、散歩中、附属図書館のポスター

6、鹿児島大学総合研究博物館をご存じでしたか？

はい	214	(50.1%)
いいえ	207	(48.5%)
無回答	6	(1.4%)
回答数	427	

7、今後、どんな展示を見たいですか？（重複回答あり）

動物	118	(13.8%)
植物	91	(10.6%)
昆虫	91	(10.6%)
化石	99	(11.6%)
鉱物	119	(13.9%)
歴史	73	(8.5%)
考古	121	(14.1%)
鹿大の現在の研究	86	(10.0%)
昔の実験器具・資料	59	(6.9%)
回答数	857	

<要望など>

穀物：魚：やきもの：海洋について：水生生物の展示など：恐竜（大型でなくても、地域的な、身近な）：どちらかというと、植物に関する展示が見たい。植物が関わっているものであれば、「動物」でも「鉱物」でも何でもいい。：鹿児島県の火山活動、地形のなりたち：めずらし動植物（亜熱帯特有の）があれば見たいと思います：子供がさわれる展示がたくさんあると良いと思います：教官がどのような研究をしているのかわかりやすく展示する機会があれば、学外の方や高校生などにも大学のことをよく知ってもらえるのではないかなと思う：クリーニング前と後の化石をくらべることができればおもしろいと思いました／研究テーマなどは、専門分野で、私たちには理解し難い分野だと思っていましたが、人類すべてに関わるテーマなんだと実感しました。“化石”というと、とてもカタイ分野だと思っていたのですが、おもしろいですね。とても楽しい時間でした：展示のことを地域の人たちに知ってもらって、来てもらえれば、みんなが関心を持つかもしれません：星、電気のできかた、オーロラのできる位置（小学生）：昔の巨大ザメ、犬歯の長いトラ／動物とりわけ人体：天文学関係：恐竜の化石を！！：地層のサンプル、鹿児島は火山地なので年代決定方法が知りたいです：大学のもつ様々な資料をこれからもどんどん公開してください：「鹿児島大学の現在の研究」をわかりやすく、おもしろく展示して下さい：もう少し資料を多くしてもらいたい：鹿児島はたくさんの植物があるときいてますので、植物に関する展示を見たいです：何でも気やすく話しをして下さって、大変たすかりました：地学を初歩から学びたいです。講義や野外調査など、市民が学べる講座があれば是非、受講したいです：ニホンミツバチの南限に就いて知りたいです。（鹿児島県はニホンミツバチの飼育がさかんと聞きました）：年代測定法が知りたいです：地学を初歩から学びたいです。講義や野外調査など市民が学べる講座があれば受講したいです：いろいろな説明をしていただき、新しい発見がたくさんありました：化石をほってみたいので、そういう企画があったら参加したい：植物が関わっているものであれば、「動物」でも「化石」でも「鉱物」でもいいです。次回を楽しみにしてます：身近な犬や猫の化石が見たい：化石や考古はものすごく長い時間を感じれるのでやってほしいです：このような機会がもっと増えてほしい

8、その他気づいた点があれば、自由にお書きください。

<会場について> <展示形態、テーマ自体について> <展示全般について>

順路の始めにある遺体化石と生痕化石のところで分類されているのか、いないのかが判断できなかった：「化石」のイメージが変わりました。見るものすべてが良かったです。化石だけでなく、現生の生物（ウミユリなど）と併せて展示してあるので、遠い生物としてでなく、今につながっているんだというような現実感があって、とても興味が湧きました：展示スペースが少し狭いと思います：また面白い展示をお願いします：展示ボランティアの面々が良く説明くれた。

勉強していることがわかります。分からないことも担当の方がわかりやすく説明してくれたのでよかった：今後の資料集めに努めていただきたい：とてもおもしろいサンプルです：展示してあるものが高い所に置いてあって、あんまりみえなかった：もう少し展示数を増やしても良かったと思う：初歩的なことかもしれませんが、もうすこしいろいろと解説してくださるといいと思いました：地質年代、地元の地層、地質図など色分けしてあって、よかったと思います：種子島の化石にも、より興味をもちました。是非、勉強してゆきたいです。：説明を聞きながら展示を見たので、とても興味をもてました。子供にも経験してもらいたいと思いました：全て鹿大の財産とはびっくりしました：ある程度、要点だけでも説明、解説があればもっと楽しめると思います：熱心に分かりやすい解説してもらい、大変勉強になりました：あまりの多さにびっくりしました：語り部はやはり重要、展示物の価値が理解できる：ゆっくり見学することができました：むかし鹿児島湾でホオジロサメが泳いでいたと本で読みました。ロマンを感じますね：北海道でとれたアンモナイトの形がおもしろかったです：展示の説明で、自分にとって未知の世界だった‘化石の世界’に触れることができ、今年も地球の神秘に一步近づけたような気がします。自然界の営みの不思議を知ることが地球環境を守る気持ちにつながると思います。博物館の活動はまさにその一端を担っているといえます：歴史上の人物に関する展示（その人の歴史、資料）、インカ帝国やローマ、エジプトなどの文明展もしてほしい：何億年前というのはもうイメージがわかなかった：明るくてみやすかったです：説明が少し難しかった。手で触れたのはよかった：年4回くらい、みてみたい（異なる展示）：展示台の置き方、順路がよくわからなかった：時代ごとに分けて展示したり、現在のものと比較したり工夫されていて判りやすかったです：期間中いつも開いているというのは、来やすかったです。リピーターです：とても見やすい配置でよかったです：わたしは水産学部なので、このような研究もあるのかととても興味をもちました：化石のお土産がもらえたのはうれしかったです：展示されている化石等の貴重さの度合いをもう少し明確にしてもらえるとありがたい：有孔虫の写真に名前があったらなと思いました：化石の名前とイメージがわからないものがありました。できれば、写真等と一緒に展示してもらえればと思います：顕微鏡でのぞけるのがおもしろかったです：見やすい展示だった。海を意識されたのか「青」を使った展示も良かったです：時代と海の深さごとの展示はわかりやすかったです。これから、「海」を見る自分の見方も変わりそうです：化石に触れたり、顕微鏡で実際に見ることができて大変興味深かった。普段、このようなものを見ることは少ないので、良い経験になったと思う：現生のものと比べることができるものがもっと多いとうれしいです：有孔虫をスライドガラスの番号のついた枠の中に分けてあったが、細かい作業で大変そうだなあと思った：ムービーみたいなものがあってもよいのでは

<その他>

- ・大学内に入って迷ったので、案内版が構内の入口などにあればよい
- ・展示会場への地図を、みんなが判るように標示してください、大学がひろすぎてわかりにくかった
- ・ひとりで歩くとわからないが、ボランティアガイドの方がポイントをおさえて話してくださったので、子供の頃の脳になって刺激的だった
- ・植物園にオオゴマダラが飛んでいて、とても感動しました
- ・今後とも一般公開を期待しております
- ・常設展示室が早くできるといいですね
- ・鹿児島でも化石がとれることがわかって興味がでました
- ・子どもたちへのPRをされればよいと思います
- ・ハングル語で説明してください。ハングル語の説明が要ります
- ・博物館や水族館の中だけのものが、身近に感じました
- ・博物館の建物が完成し、本格的な展示が早く行われることを楽しみにしています

- ・ 堅苦しい場所でなく、気軽に来れるところがよかった。時代を追って説明していただいたので、鹿児島島の地質、地形、成立ちがよくわかった
- ・ どんどんPRしていろんな人たちにみてもらうようにしては
- ・ 参考図書の販売があったら良かった
- ・ 子供たちが見る機会があればよろこぶと思います
- ・ 時間があればもっとじっくり見たかったです
- ・ 照明を薄暗くして、展示品をライトアップすると雰囲気が出て、ロマンチックかなと思いました
- ・ この素晴らしさを見に来てもらいたい

5. 企画展「郡元キャンパスの古墳時代—理学部2号館出土土器」

企画展 「郡元キャンパスの古墳時代—理学部2号館出土土器」

期間 2003年6月10日～6月26日

場所 鹿児島大学附属中央図書館 1F中央ロビー

開館時間 図書館開館中

入場無料

本展示は毎年秋に実施する特別展とは別に特徴ある資料の特集的な展示を企画したものである。展示資料は鹿児島大学構内遺跡出土の土器が約100点と規模も大きなものではない。

展示テーマは鹿児島大学構内遺跡郡元キャンパスのなかでもとくに大量の資料が出土した理学部2号館（釘田第8）地点出土の土器を紹介するものである。

本地点の発掘調査は1976（昭和51）年に実施され、大量の古墳時代土器を中心とする資料が出土した。これらの資料は南九州地域での古墳時代資料としてもっとも重要かつ良好なものである。しかしながら、さまざまな経緯から今日までその調査成果が報告書として公開されておらず、また展示等の公開も、総合研究博物館で実施した2001年度特別展「古代からのおくりもの—鹿大に眠る遺跡—」以外ではほとんど行われていない。そのため、この地点出土資料にスポットをあて展示を行った。

展示は中央図書館1F中央ロビーで行った。図書館は学内のみならず、一般市民にも常時開放されているため、学内外からの見学が可能であり、実際に学外からの見学者の問い合わせも多数あった。ただし、展示係等は設けなかったため、見学者実数等は不明である。

展示期間中には、総合研究博物館が共催する九州前方後円墳研究会研究大会が鹿児島大学にて開催されたため、全国の古墳時代研究者が鹿児島の土器の特徴を実物から知る機会を提供し得たこととともに、鹿児島大学構内遺跡の重要性についても認知されたものと考えられる。



企画展「郡元キャンパスの古墳時代」

6. ワークショップ「アジア東部に独自の穀類のモチ性とモチ文化」

2004年2月28日、阪本寧男氏（京都大学名誉教授）を講師に招き、第2回ワークショップ「アジア東部に独自の穀類のモチ性とモチ文化」を開催した。阪本氏は、ユーラシア各地でムギ類やアワなどのイネ科穀類に関するフィールドワークをおこなってきた民族植物学者である。その成果のひとつとして、モチ性のイネ科穀類を利用する食文化に注目し、『モチの文化誌－日本人のハレの食生活』（中公新書、1989）を出版している。また、鹿児島大学農学部非常勤講師を長く勤めた経験から、あくまきや栗ご飯など鹿児島県のモチ性穀類食品についても関心をいだいてきた。

このようなことを背景に、今回のワークショップでは、まず雑煮や赤飯など日本人の食生活を例に、モチ性のイネ科穀類を利用する「モチ文化」について紹介した。つぎに、その民族植物学的な基礎、すなわち1)モチ性が7種のイネ科穀類にのみ見出され、2)それらが世界の中で東南アジア大陸部、島嶼部とアジア東部だけに分布し、3)この地域に多様なモチ文化がみられることを指摘し、モチ文化にかかわる穀物の種類の多様性と地理的な広がりを明らかにした。そして最後に、モチ文化が形成された背景として、「モチ文化起源センター」について解説した。つまり、「モチ文化起源センター」と考えられる東南アジア大陸部では、長い歴史の中でヤムイモやタロイモ類の野生種を採集、利用してきたことにより、粘性のある食品に対する嗜好性が形成され、それが原動力となって穀類のモチ性品種を文化的に選択されたことを推定したのである。

このワークショップは「ねばねば食品はどこから来たのか」という素朴な疑問をもとに、穀類と食とのつながりを探るところみとなった。参加者からは、「日本以外の地域にもいろいろなモチ性食品があることを初めて知った」、「ふだん食べているものをあらためて見直すようになった」などの感想が聞かれた。身近な食品をきっかけに、鹿児島や日本の食文化を広く東南アジア、東アジアの食文化のなかに位置づけることができたと思う。

7. 実験教室「DNAを抽出、分析しよう（実験）さまざま役立つDNA分析（講義）」

博物館実験教室を2003年8月2日(土)の13時30分より16時30分まで鹿児島大学総合教育研究棟201号室で行った。

7月上旬、関係諸機関に実験教室の案内状を発送し、参加者を募ったところ、募集人員の15名（対象：中学生・高校生）を大幅に超える27名（中学生14名、高校生13名）から応募があった。抽選の結果、中学生9名、高校生6名の計15名の参加者が決定され、参加者決定者には受講証が、抽選にもれた人にはその旨知らせる葉書をそれぞれ発送した。

実験「DNAを抽出、分析しよう」、講義「さまざまな役立つDNA分析」と題して、内木場哲也（総合研究博物館）が主に解説と指導を担当したほか、当日は学生アシスタント2名が参加し、実験をサポートした。また、オブザーバーとして有馬一成氏（鹿児島大学理学部生命化学科助教授）、丸野勝敏氏（総合研究博物館学外研究協力者）の参加を得た。

この実験教室のねらいは、生物のDNAを扱うことでDNA（遺伝子）のもつさまざまな意味を考え、博物館における研究にDNA分析が生かされていることを伝えることにある。

実験教室当日、参加者は講師により用意された7ページにわたるテキストに基づいて、スクリーンで映像を確認しつつ、実験の意義、概要、操作手順、用意するもの、実験全般の諸注意について講義を受けた。参加者ひとりずつ植物（ブロッコリー）からDNAを取り出すことができるとあって、緊張と期待の実験教室となった。DNAの抽出から精製・検出までが2時間、講義、休憩、質問等を入れて、のべ3時間に及んだ。

グループごとに実験を進める中、講師による実験を成功させるポイントが随所に伝えられ、参加者は注意深く耳を傾けながら、真剣な眼差しで取り組んでいた。最後に、電気泳動装置による像が参加者に配られるまでの間に休憩を挟んだ。

講義では、さまざまなDNA分析について例をあげ解説された。参加者は生活に身近な場所でさ



実験教室



実験風景

まざまな役立つDNAが分析されていることを再認識できたものと思う。また、DNA研究の現在と未来についても解説し、遺伝暗号としてはたらくDNAのもつさまざまな意味を参加者があらためて考える機会になったと思われる。

事後に追加資料として、ブロッコリーの染色体（ゲノム）DNAのアガロー電気泳動像および実験の当日に映写した画像の写しを、参加者全員へ送付した。

8. その他の活動

(1) 特別講演会

7月29日(火)の午後4時～6時に、鹿児島大学理学部1号館1階103室（南側）において、ウィーン大学古生物学教室のHohenegger教授が、“Larger Foraminifera and Symbionts, markers of (Paleo-)oceanographic conditions in tropical and warm temperate shallow seas”のタイトルで、熱帯～亜熱帯に生息する大型有孔虫の生態、分布、遺骸の運搬などを中心に講演を行った。約30名の教官と学生が参加があった。

(2) ミニコンサート 「海の調べ」

特別展の一環として、11月16日(日)の午後1時半～3時まで、鹿児島大学総合教育研究棟1Fエントランスホールにおいてミニコンサート「海の調べ」を開催し、100名をこえる市民が美しいフルート、チェロ、ピアノの演奏に聞き入った。フルートは池田博幸氏、チェロは有村航平氏、ピアノは中島俊子氏が演奏し、バロックから映画音楽まで、様々なジャンルの曲に聴衆は満足した様子であった。



ミニコンサート会場



池田 博幸氏(中)・有村 航平氏(前)・中島 俊子氏(奥)

(3) 生涯学習県民フェア

2003年5月17日(土)午前10時～午後4時30分、かごしま県民交流センターで開催された第15回鹿児島県生涯学習県民フェアに総合研究博物館の広報活動の一環として、専任教官2名、事務職員1名で参加した。

大学関係では当館を含めて3校で、他に国立の少年自然の家、市町村の教育機関、その他の教育関係任意団体が展示セクションへ出展した。午前10時40分から「県民のニーズに対応するこれからの生涯学習の推進について」のテーマでシンポジウムが行われ、午後2時35分から作家 荻野アンナ氏の「好気心の動かし方」と題する講演が行われた。ほかに、かごしま県民交流センターの野外会場では、ふるさと自慢・手作り自慢品の即売や農業高校の農産物即売なども併せて行われた。2回目の参加で、展示会場入口正面の最も目立つ位置にブースをいただいた。

しかしながら、広大な会場の1階にあたるシンポジウム会場へ入場者が吸い込まれていくが、2階奥の展示セクションへの入場者は極端に少なかったので急遽、広報用パンフレットをシンポジウム会場入口周辺および建物入口で配布することにした。その甲斐あってか、やっと入場者の一部の方々にもご覧いただくことができた。

当館は学術資料として金鉱石および化石、教育研究史を物語る理科学機器からなるミニ展示、市民講座、公開講座、実験講座をはじめとする各講座やボランティア活動、博物館業務紹介などのパネル展示ならびにその説明をおこなった。

他の展示ブースでは生涯学習県民大学講座生の作品の展示、生涯学習のとりくみを示す展示、研究成果についての紹介の展示、技術開発製品の展示、写真パネル展示などが行われていた。来場者からは博物館主催の市民講座、公開講座等の案内を送付してほしいとの要望も寄せられた。

この行事には鹿児島大学の部局のなかで総合研究博物館のみが参加したが、会場にて鹿児島教育委員会の担当者より、今後も生涯学習全般にわたり総合研究博物館の協力を得たいとの要請があった。また、1階ホールの県内の大学のコーナーを積極的に活用してほしいと声かけがあり、博物館広報パンフレット、企画行事の案内ビラを配架した。地域に根ざした活動を念頭に、地域貢献へのとりくみの必要性を実感した。

(4) 共催 鹿児島県立図書館「日本の金鉱石」

7月26日(土)～8月6日(水)の期間、鹿児島県立図書館で、鹿児島大学総合研究博物館所蔵の金鉱石を展示した。日本地図(ランドサット)に日本の金山の位置、総産金量、鉱床生成年代が一目でわかる展示に、自分達の町に金山があるかどうかを確かめる市民が多くみられた。また、鹿児島県が、なぜ日本一の産金量を誇るのか、金山の位置と火山フロントの関係に興味を抱く市民が見受けられた。



鹿児島県立図書館「日本の金鉱石」

(5) 共催 九州前方後円墳研究会第6回大会

「前方後円墳築造周縁域における古墳時代社会の多様性」

九州前方後円墳研究会は、九州の古墳時代研究を行っている考古学研究者によって運営されている学会である。主要な活動は、ニューズレターの発行などとともに、九州各県持ち回りで例年1回開催する研究大会の実施である。

その第6回大会は鹿児島が担当であったため、池畑耕一氏(鹿児島県立埋蔵文化財センター)を代表として、大西智和氏(鹿児島国際大学助教授)・中村直子氏(鹿児島大学埋蔵文化財調査室助教授)・橋本達也(総合研究博物館)で大会実行委員会を結成し、総合研究博物館の全面的



九州前方後円墳研究会第6回大会

なバックアップを受ける共催事業として、計画から実行をおこなった。

また、九州国立博物館設立準備室も共催として参加した。

当日は、九州各県はもちろんのこと、東北から沖縄に至るまさに全国からの参加者があった。参加者は230名を超え、また世代・性別ともに、多彩な様相を見せ、研究テーマが広く関心を集めるものであったと考えている。

研究会の構成は下記の通りである。

2003年6月14日

【地域発表】古墳築造の周縁域の諸相

- 13:00-13:10 開会挨拶・趣旨説明
- 13:10-13:50 「南九州における古墳の形成と展開」柳沢一男（宮崎大学教育文化学部）
- 13:50-14:30 「壱岐・対馬および長崎の古墳の様相」尾上博一（厳原町教育委員会）
- 14:30-15:10 「四国西部における前方後円墳の展開」村上恭通（愛媛大学法文学部）
- 15:30-16:10 「北の周縁域の墳墓」藤沢 敦（東北大学埋蔵文化財調査センター）
- 16:10-16:50 「琉球列島の古墳時代併行期前後の様相」安座間充

【記念講演】

- 17:00-18:00 「周縁から前方後円墳を考える－前方後円墳体制論の再検討－」白石太一郎（国立歴史民俗博物館）

【懇親会】

- 18:30-20:30 懇親会場：エデュカ（鹿児島大学生協教育学部店）

2003年6月15日

【テーマ発表】交流の諸相～南九州を中心として～

- 9:00-9:30 「南九州の集落と土器の様相」坪根伸也（大分市教育委員会）
- 9:30-10:00 「副葬鉄器からみる南九州の古墳時代」橋本達也（鹿児島大学総合研究博物館）
- 10:00-10:30 「西日本の積石塚」大西智和（鹿児島女子短期大学）
- 10:50-11:20 「古墳時代併行期の九州と南島」木下尚子（熊本大学文学部）
- 11:20-11:50 「人類学からみた南九州の古墳時代人」竹中正巳（鹿児島大学歯学部）
- 12:50-13:30 ポスターセッション
- 13:35-15:00 シンポジウム

ポスターセッション

- | | |
|---------------------|-------------------|
| 肝属郡高山町 塚崎古墳群 | 東諸県郡国富町 前の原地下式横穴墓 |
| 肝属郡串良町 岡崎古墳群 | 鹿児島市 鹿大構内（郡元）遺跡 |
| 世田谷区下野毛根遺跡、喜多見宮之原遺跡 | 地下式横穴墓 宮崎市櫛1号墳 |

場所：鹿児島大学教育学部大講義室

(6) 後援 日本熱帯生態学会第13回年次大会公開シンポジウム「熱帯林の減少とその原因」

日本熱帯生態学会第13回年次大会が鹿児島大学で開催されるにあたり、公開シンポジウム「熱帯林の減少とその原因」(2003年6月15日稲盛会館)を鹿児島大学総合研究博物館が後援したので、その内容について紹介したい。

シンポジウムでは、まず米田健(鹿児島大学農学部生物環境学科)が、熱帯林の現状とその保護に向けての取り組み全般について概説したあと、4名のスピーカーが次のような講演をおこなった。

講演1 「インドネシアにおける森林保護区の荒廃」

鈴木栄治(鹿児島大学理学部地球環境科学科)

講演2 「熱帯林の保全におけるローカルガバナンスの重要性：西クタイ県の試みをもとに」

井上真(東京大学大学院農学生命科学研究科)

講演3 「東南アジア大陸部山地の森林保全—ミャンマーとラオスの事例から」

竹田晋也(京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科)

講演4 「東南アジアの熱帯林を中心とした国立公園・保護地域の現状と課題」

薄木三生(東洋大学国際地域学部)

熱帯林の減少は世界各地に共通してみられる現象であるが、地域ごとにその背景や要因、そして対応のあり方は異なっている。その意味で、それぞれに特定の地域の熱帯林を対象とした豊富なフィールドワークの経験を持ち、また専門分野が生態学(鈴木)、森林政策学(井上)、森林資源学(竹田)、自然環境保全(薄木)と互いに異なるスピーカーを4名集めたことで、地域による事情の違い、また熱帯林の持つ役割の違いを明確にすることができた。

このテーマに対する一般の関心は高く、稲盛会館がほぼ満席になるほどの盛況ぶりであった。その中には、学外研究協力者や博物館ボランティアが積極的に参加するようすがあった。熱帯生態学会の活動の一部がこのような形で公開され、それを鹿児島大学総合研究博物館が支援できたことは意義深いことであったといえるだろう。

(7) 共催 生命科学学術講演会 第4回「麹菌を利用したゼロエミッションシステム」

2004年2月16日(月)13時30分より理学部220号講義室(郡元キャンパス)において第4回生命科学学術講演会を「麹菌を利用したゼロエミッションシステム」と題して開催した。講師には霧島高原ビール(株)の山元正博 代表取締役を招いて、一般市民、研究者、学生を対象に講演いただいた。

山元氏は麹菌の出す発酵熱を利用して生ゴミを発酵飼料化するシステムや光合成細菌・酵母などを利用した、し尿処理によるBOD 10PPM以下の水をトイレに再利用するなど、環境に配慮した画期的なアイデアとシステムでゼロエミッションを実現し、各方面から注目を集めている。

第3回生命科学学術講演会に引き続き、同講演会は、鹿児島大学理学部生命化学科有機生化学講座と総合研究博物館の共催事業として行われた。参加者は学内外の研究者、理学部の生命化学科、地球環境科学、農学部、法文学部などの学生を中心に136名の参加があった。

本講演では、地球環境の保全が叫ばれながらも、現代社会における経済活動と切り離すことのできない産業廃棄物の処理問題を、研究者の視点から直営施設において微生物を利用した廃液や生ゴミ処理を実施しているとりみくをふまえて講演いた



山元 正博氏

だいた。

講演は予定の60分を超えたが質疑応答も活発で関心の高さが伺われた。参加者からは経済動向や経済コストを数値で示され、具体的でわかりやすいと好評であった。また山元氏は企業や社会が求める人材等について経営者の視点も述べられ、学生にとっても大変有意義な講演であったと思われる。

9. 出版・広報

本年度の、主な出版物はニューズレター No.7・8であった。

ニューズレター No.7では2002年に農学部より寄贈を受けた高等農林学校時代の機器・ノート類や養蚕繊維関係資料の紹介を中心に行った。また、肝属郡申良町岡崎古墳群第2次調査の成果の紹介も行っている。A4・8ページ。

ニューズレター No.8は、2003年10月から11月にかけて開催した第3回特別展「海と生命の歴史－化石は語る－」の展示解説をかねて紹介を行った。A4・16ページ。

ポスター・チラシ 第3回特別展「海と生命の歴史－化石は語る－」にあわせて展示案内用のB2ポスターおよびA4のチラシを作成した。ポスターは学内各所に掲示し、また各教育委員会や博物館等の施設にも送付し、掲示の依頼を行った。また、ポスターは市営交通の車内吊り広告用も作成し、掲示を委託した。

九州前方後円墳研究会研究発表資料集 共催事業である第6回九州前方後円墳研究会「前方後円墳後円墳築造の周縁域における古墳時代社会の多様性」にあわせて、発表資料集を作成した。

各発表者からは大部の論考が寄せられ、また誌上へのみの集成作業、資料紹介も収載したのでA4・334ページにおよぶ資料集ができあがった。

10. ボランティア活動

昨年に引きつづき、博物館業務のうち人員を要するものについて作業を円滑に進める目的で、ボランティアの募集を行った。昨年より活動を継続している参加者も含め、のべ28名が参加した。

(1) 第2回特別展に関わる業務の補助

6月～9月、学生ボランティアの協力で化石標本の運搬・整理・清掃ならびに展示標本準備作業を開始。展示の標本として500以上をリストアップした。

10月、展示標本リストに合わせてキャプションなどの製作を開始した。特に500枚を超えるキャプション作りはボランティアの協力が必要であった。また特別展ポスター、リーフレットの配布協力も行った。

10月21日より、会場の清掃、準備、設営、搬入、23日より、特別展案内（11月24日まで）に協力（会場における誘導・監視の係に24名）した。

会場係は1時間30分を1単位として学生がボランティアに参加しやすいように時限を単位に交代制として行った。ボランティアの中には第3回特別展「海と生命の歴史－化石は語る－」担当の大木より、機会あるごとに展示解説の講習を受け、トレーニングを積んだ参加者もあり、折をみて入場者向けに解説を務めることもしばしばで、好評であった。また、パンフレットの配布、アンケートへの協力依頼も行った。11月25日、26日には搬出、清掃、会場の現状復帰に協力し、終了した。

特別展期間中の11月16日に行われたミニコンサート「海の調べ」では、椅子の設置と撤収、出入口や入場者の整理、開始のアナウンス、入場者集め等々、サポートを担った。

(2) 教育・研究史資料整理・登録の補助

学内より総合研究博物館へ受入れのあった教育・研究機器や研究ノート類その他の資料について、連絡のあった先からの運搬をはじめとして、博物館資料として整理と登録準備作業をボランティアの協力を得て進めている。

(3) 考古学資料の整理

昨年にひきつづきボランティア（一般2名）により構内遺跡から出土した土器の接合、番号付け作業を継続した。

6. 地域貢献特別支援事業 「鹿児島フィールドミュージアムの構築」

2003年度、文部科学省「地域貢献特別支援事業」の生涯学習プロジェクトに、鹿児島大学総合研究博物館の立案した「鹿児島フィールドミュージアム構築」が採択された。

本事業の目的は、自治体と連携し、住民の主体的な参加のもとに、文化財や自然などの再評価、保存、維持を行ない、データベース化し、実践的、能動的な生涯学習の場を提供することにある。そのために鹿児島県全体をひとつの博物館『鹿児島フィールドミュージアム』と位置づけ、その中の展示物に相当する地形・地質、動植物、文化財、施設などをノード（結び目）として、それぞれのノードに地域の特性を活かした情報を集積すると同時に、ノードをネットワーク化することにより、「現場で本物と接することのできる博物館として活動を展開することを試みた。

初年度である2003年度は、ケーススタディとして4自治体（始良町歴史民俗資料館；郡山町教育委員会社会教育課；指宿市考古博物館；伊仙町教育委員会社会教育課）と連携し、10月3日に第1回ノード連絡会議を開き、生涯学習に活かす自然環境や歴史的背景、人材等のデータの再評価、位置付け、保存方法を検討した。一方で、自治体や地域住民からの要望に応えるため、大学研究者にフィールドミュージアム・アドバイザーとしての協力を要請し、45名の参加が得られた。

本事業に先行して、2002年度に大島郡伊仙町と県による伊仙町小島の露頭保存事業に関して現地調査と技術指導を行ない、2003年度も継続してアドバイスを行った。その他、8月23日に熊毛郡南種子町教育委員会から打診のあった河内化石礁を含む地層の保存について現地調査と技術指導を行った（News Letter No.8にて紹介）。



徳之島 伊仙町 小島



種子島 南種子町 河内化石礁

7. 標本関連活動

(1) 植物標本

2003年度、植物標本室とその収蔵標本に関連しておこなった主な活動は、以下の通りである。

① 整理補修作業

前年に引き続き、福元助手とボランティアの小田原祥子氏が、標本の補修と汚れおとしの作業を行った。この作業は毎週火、水、木曜日の午後に継続的に実施している。

②利用者への公開

2003年4月から2004年3月までに、のべ315人の植物標本室利用者があった。そのなかには、京都大学、大阪市立自然史博物館、宮崎大学などの国内の研究者だけでなく、オランダ国立標本庫やラオス国立大学林学部などの海外の研究者も含まれている。また、教育への活用も積極的に行い、農学部生物環境学科森林管理学講座の学生、農学部講義「民族植物学」、農学研究科講義「民族植物学特論」の受講者が植物標本室を見学し、植物標本の意義とハーバリウムの役割について、理解を深めた。当日まで植物標本庫の存在すら知らなかった学生も多かったが、膨大な数の標本をじかに見ることによって、鹿児島大学における植物研究の歴史を実感したようすであった。

③植物標本データベースの構築

植物標本室に収蔵されている標本について、国内外に広く情報を公開するため、世界統一基準のデータベースシステム、GBIF (Global Biodiversity Information Facility) に参加し、植物標本データベースの構築に着手した。

その構想については、落合が植物標本データベース懇談会 (2003年1月27日、東京大学) に参加し、国内の他の博物館やハーバリウムでの取り組み状況を把握、データベースの必要性和その実現方法について情報を得たことがきっかけとなった。その後、日本植物分類学会植物データベース専門委員会を通じて、統一フォーマットを入手し、ラベル情報の入力方法を検討した。また、学術情報基盤センターの森邦彦教授、佐野英樹助手に協力を仰ぎ、データベースの構築や公開方法の技術的な問題点について話し合いを行った。

このような経過の後、学長裁量経費により岩井雄次氏を雇用し、11月よりデータ入力作業を開始した。採集年月日、採集地、採集者名、生育地の状況、同定履歴などのデータをラベルから読み取り、フォーマットに入力する作業は、正確さが要求されると同時に、手間のかかるものである。作業開始当初は、データの扱いに関する問題を解決しながら、丁寧に作業を進める状況が続いた。その結果、2003年11月から2004年3月までの間に、キツネノマゴ科 (Acanthaceae) からヒユ科 (Amaranthaceae) の途中まで、2138件のラベル情報を入力することができた。

植物標本データベース入力にはたいへんに時間がかかることが予想され、また、標本の画像データを取り入れるかどうか、標本にバーコードをつけるかどうか、などといった技術的な問題も山積している。現時点では、ラベル情報入力が終わった分類群から、総合研究博物館ホームページで公開することを目指しつつ、活動を続けていくことを計画している。

(2) 鉱石標本

浦島幸世 鹿児島大学名誉教授から大学博物館へ寄贈された1万点近い金鉱石標本のほとんどは長らく、住友金属菱刈鉱山にあずけられていた。それらの金鉱石を鹿児島大学へ搬送する準備を4月から始め、2003年度内にすべての標本の移送を終了した。移送と平行して浦島氏協力のもと標本整理に着手し、データベース化を進めた。

第3回特別展に関連して、おもに理学部地球環境科学科から寄贈された多量の化石標本を整理し、見えなかったラベルを書き直す作業を行った。

(3) 新たに所蔵された主な標本類

農学部獣医学科動物標本

2003年3月の西中川駿 農学部獣医学科教授の退官にともない、同学科家畜解剖学講座で収集・保管されてきた資料の多くを総合研究博物館で管理することになった。

西中川氏を中心として収集された資料は脊椎動物の骨格標本である。とくにウマ・ウシに関する資料がその大部分を占めている。

また、西中川氏は動物考古学の代表的な研究者として、遺跡出土の動物鑑定を数多く手がけている。そのため、各地の教育委員会等から鑑定を依頼された数多くの発掘調査による出土資料が研究室で保管されていた。これらはすべて総合研究博物館で預かり管理するものとした。出土資料は埋蔵文化財であり、基本的に文化財保護法上の規定によって県教育委員会ないし当該教育委員会の所蔵することを原則とするものであるため、これら行政からの返却の依頼があるまでの間、総合研究博物館で保管することとした。

主たる骨格標本は以下のものである。いずれも何体分であるのかは、現状では正確に把握できていないが大型の野菜収穫カゴで200を超える数が存在する。とくに口之島野生化牛は数が多い。

ミサキウマ
トカラウマ
サラブレッド
口之島野生化牛
三島牛
黒毛和牛
ホルスタイン
その他 牛
ノウサギ



動物骨格標本

また、遺跡出土動物骨資料はほとんどが鹿児島県および県内市町村より寄託されてたものであるが、なかは宮崎県や関東の資料も含まれている。また一部には、西中川氏以前に林田重幸 教授が鹿児島や台湾の貝塚などの調査によって収集された資料も含んでいる。

公衆衛生関連資料

2003年6月、尾上佳代子 医学部保健学科助教授の退職にともない、同氏が保管・管理されていた資料を総合研究博物館に寄贈いただくこととなった。

資料は、鹿児島県立公衆衛生看護学院にかかわるレポート類と実習日報、鹿児島大学医学部付属看護学校・保健婦学校にかかわるスライドフィルムである。

鹿児島県立公衆衛生看護学院は、昭和32年に鹿児島県立看護学校公衆衛生看護学科を改組して発足し、昭和36年には国立に移管され、鹿児島大学医学部付属保健婦学校となっている。この間、存続期間が4年ほどの学校である。寄贈を受けた資料は、このうちの初期の2年度に関するものである。

A. 研究資料綴というレポートなどをとじ合わせたものが3冊ある。いずれも、B4手書きを青焼きしたもので、ところどころに教員が書いたと見られる鉛筆の書込がある。

① 昭和33年5月 研究資料綴 看護歴史

看護の歴氏に関するレポート歴史

「看護歴史」、「赤十字について」、「日本看護史」などである。学生は16名、綴りの表紙には教員名「安永」の記載がある。

② 昭和33年 6月 研究資料綴 T・B予防

「結核予防会について」

「保健所 1. 結核予防行政事務 2. 結核予防諸事業の実施部門 3. 保健所における結核活動の実状」

添付資料 「昭和31年 6月 在宅結核患者訪問指導措置要項（鹿児島県・鹿屋保健所）」「結核療養所」

綴りの表紙には教員名「安永」の記載がある。

③ 昭和33年度 研究資料綴

「保健所」、「結核療養所」、「日本看護史」、「赤十字」など

B. 保健所実習日報一覧表

昭和32年・33年に保健所で実習を受けた際の記録を一覧表にしたものである。

実習中の一日の時間の使い方などを一目で理解できるように表やグラフを作成している。

項目は「家庭訪問」、「健康相談」、「予防接種」、「集団検診」、「関係機関との連絡」、「会議」、「衛生教育」、「その他」となっている。

① 昭和32年11月～1月 第1回生

伊集院・川内・指宿・鹿屋などの保健所で9名の学生が実習を行った際の日報を一覧表にしたものである。記録のある学生9名。

② 昭和33年10月～12月 第2回生

この年のほとんどの実習は期間の2/3を川内・鹿屋・指宿・出水などで行い、残りの1/3を中央保健所か山下保健所という鹿児島市内で実施している。学生11名分の記録がある。

C. 鹿児島大学医学部附属看護学校～保健婦学校期のスライドフィルム

昭和33年以降の昭和30年代に購入されたものと見られる。ほとんどが実際には使われず、新品状態のまま保管されてきたものと見られる。

全部で34本保存されており、タイトルには「わたしは保健婦」、「人類の進化」、「事故はどこにも」、「性病とはどんな病気か」、「ガン細胞の分裂増殖」、「赤ちゃんの日常生活」、「女性はどうな特色をもっているか」、「児童福祉法とは」、「止血法とその他の緊急手当」、「結核は忍びよる」、「しあわせな結婚にそなえて」、「白雪姫のお話」、「弱虫健ちゃん」などがある。

8. 2003年度 ポスター

第3回

鹿児島大学総合研究博物館 特別展

海と生命の歴史 化石は語る

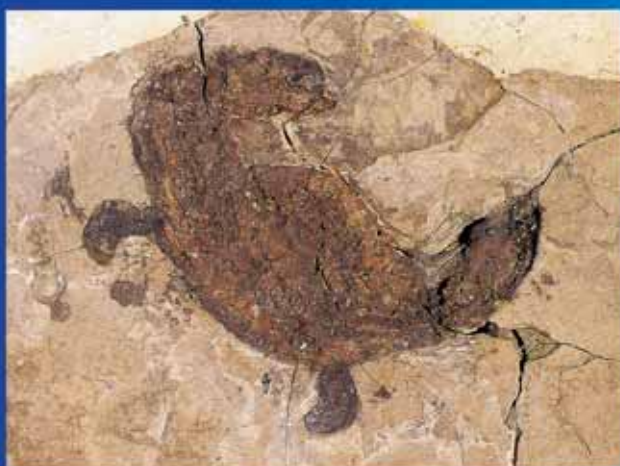
2003.10/23(木)～11/24(日) 9:30～17:30

(期間中全日開催)

鹿児島大学 郡元キャンパス

総合教育研究棟 2F プレゼンテーションホール

入場無料



公開実習 「三葉虫を調べよう」

講師 大野 照文 京都大学総合博物館教授
日時 11月16日(日) 10:00～12:00
場所 鹿児島大学郡元キャンパス
総合教育研究棟 2F 201

市民講座 「三葉虫が見た海の世界」

講師 大野 照文 京都大学総合博物館教授
日時 11月16日(日) 15:10～16:40
場所 総合教育研究棟 2F 201

ミニコンサート 「海の調べ」

池田 博幸氏・有村 航平氏 ほか
日時 11月16日(日) 13:30～15:00
場所 総合教育研究棟 1F エントランスホール



鹿児島大学総合研究博物館

〒890-0065 鹿児島市郡元 1-21-30 TEL/FAX (099)285-8141
<http://www.sci.kagoshima-u.ac.jp/~uchik/museum-top.htm>

第3回 鹿児島大学総合研究博物館 特別展

海と生命の歴史 化石は語る



2003.10/23(木)～11/24(日) 9:30～17:30 (期間中全日開催)

鹿児島大学 郡元キャンパス総合教育研究棟 2F プレゼンテーションホール



◀川辺町産
小学生の発見した
白亜紀後期(中生代)のアンモナイト化石

化石が昔生きていた生物の遺骸であることは、今ではあたりまえのように考えられていますが、地層の中から見つかる化石をそのように理解することは大変難しかったようです。このような正しい化石観を持ちえた一人に、ルネッサンスの時代に活躍したレオナルド・ダ・ヴィンチがいます。彼は古生物学・地質学者でもあったのです。

ところでみなさんは、化石をどのようにイメージしていますか。多くの方から、昔生きていた生物の遺骸が石のように硬くなったものという答えが返ってきます。化石という漢字のイメージから、そのように考えているようですね。化石は英語でfossilと言いますが、もともとはラテン語の「掘り出した物」という意味で、石に化けるというニュアンスはないのです。その意味ではシベリアの永久凍土から発見されたマンモスは、肉が腐っていないでも化石ということになります。琥珀に閉じ込められ、ほぼ完璧な姿で保存されている昆虫も化石なのです。

化石は大きく二つに分けられます。マンモスや昆虫などの生物の遺体そのものや生物の印象として残ったものを遺体化石、生物が作った足跡、通り跡や巣穴などが地層に残ったものを生痕化石と呼びます。

これらの化石から、生物の進化の道すがら分かり、地球の歴史をひも解くことができました。地質年代のマーカーになった化石を示準化石といいます。一方で、化石を調べることによって地質時代の環境が分かります。化石になった生物が生活していた環境を知ることができるのです。このように地質時代の環境を知る手がかりになる化石を示相化石と呼びます。

第3回特別展では、おもに鹿児島大学理学部地学教室(現地球環境科学教室)に保存されていた化石の展示を通して、化石をより深く理解していただき、南九州に分布する海の地層より産出した化石から、かつて南九州に繰り広げられた海と生命の歴史を読み取っていただけることと存じます。みなさまお話し合わせの上、特別展にぜひお越しください。

会場のご案内



交通のご案内

- バス 市バス「法文学部前」下車徒歩3分、「騎射場」下車徒歩10分
鹿児島交通バス「騎射場」下車徒歩10分
- 市電 「工学部前」下車徒歩8分
- JR 鹿児島本線「西鹿児島駅」下車、バス・電車で15分
指宿枕崎線「郡元駅」下車徒歩12分
- 自動車 九州自動車道(鹿児島IC)より15分

鹿児島大学総合研究博物館

〒890-0065 鹿児島市郡元1-21-30 TEL/FAX (099)285-8141
http://www.sci.kagoshima-u.ac.jp/~uchik/museum-top.htm

鹿児島大学公開講座 「大学博物館へのいざない」

鹿大に集められた植物

—植物園と標本室—



2003年6月21日(土)10:00-15:00

鹿児島大学郡元キャンパス
総合教育研究棟201号室

募集人数:20名

受講料:無料

講師 馬田英隆(鹿児島大学農学部)
池田豪憲(鹿児島植物同好会)
落合雪野(鹿児島大学総合研究博物館)

参加希望者は、はがきに氏名、年齢、住所、電話番号を明記し、5月30日(必着)までに下記までお送りください。応募者多数の場合は、抽選となります。

鹿児島大学総合研究博物館

890-0065 鹿児島市郡元1-21-30

Tel/Fax 099-285-8141(担当:落合)

鹿児島大学総合研究博物館 企画展

郡元キャンパスの古墳時代

—理学部2号館出土土器—



期間 2003年6月10日(火)~26日(木)

場所 鹿児島大学附属中央図書館 1Fロビー

開館時間 平日 9:00-20:00, 土日 10:00-17:00

問い合わせ 鹿児島大学総合研究博物館

890-0065 鹿児島市郡元1-21-30

入場無料 Tel/Fax 099-285-8141

鹿児島大学総合研究博物館

鹿児島大学総合研究博物館 第2回 ワークショップ

アジア東部に独自の穀類の モチ性とモチ文化

講師:阪本 寧 男(京都大学名誉教授)

「ねばねば食品」はどこからきたのか — 作物と食のつながりを探る



2004年2月28日(土)13:30-16:00

鹿児島大学 総合教育研究棟 2階201号教室 聴講無料

鹿児島大学総合研究博物館

890-0065 鹿児島市郡元1-21-30 Tel/Fax 099-285-8141(担当:落合)

公開シンポジウム

熱帯林の減少とその原因

第13回 日本熱帯生態学会 年次大会

日時 2003年6月15日(日) 13:00-16:30

場所 鹿児島大学 郡元キャンパス 稲盛会館

来聴歓迎/入場は無料です

プログラム

13:00-13:10 米田 健(鹿児島大学 農学部)

「はじめに」

13:10-13:50 鈴木 英治(鹿児島大学 理学部)

「インドネシアにおける森林保護区の荒廃」

13:50-14:30 井上 真(東京大学大学院 農学生命科学研究科)
「熱帯林の保全におけるローカルガバナンスの重要性: 西クタイ県の試みをもとに」

14:40-15:20 竹田 晋也(京都大学大学院 アジア・アフリカ地域研究研究科)
「東南アジア大陸部山地の森林保全-ミャンマーとラオスの事例から-」

15:20-16:00 澤本 三生(東洋大学 国際地域学部)
「東南アジアの熱帯林を中心とした国立公園・保護地域の現状と課題」

16:00-16:30 総合討論



問合せ 鹿児島大学理学部地球環境学科 JASTE事務局

Tel/Fax: 099-285-8942 email: jaste13@sci.kagoshima-u.ac.jp

ホームページ: <http://biodiversity.sci.kagoshima-u.ac.jp>

日本熱帯生態学会 後援 鹿児島大学総合研究博物館

鹿児島大学総合研究博物館年報
Annual Report of the Kagoshima University Museum
No.3

鹿児島大学総合研究博物館 The Kagoshima University Museum
890-0065 鹿児島市郡元1-21-30 1-21-30, Kohrimoto, Kagoshima 890-0065, Japan
Printed in Japan
2005.12.27